

勉強しないための哲学

文学部哲学専攻 教授 荒畑靖宏
あらはたやすひろ

現在は文学部の哲学専攻で哲学を教えているが、私はもともと本塾大学法学部政治学科の出身である。当時の「意識の低い」、流されるままに生きていた高校生にはありがちなことだが、法学や政治学が学びたくて法学部に入ったわけではなかった。それに対して、法学や政治学の勉強を投げ出してやぐざな哲学に転じたのには明確な理由がある。法学や政治学は勉強しないと法学や政治学をやったことにはならないが、哲学の場合は勉強しなくても哲学したことになると考えたからだ。このこじらせた哲学観は、大学院入学後さらに悪化して、「勉強しないほうが哲学できる」とまで考えるようになった。なんといっても、仰ぎ見るのはソクラテス大先輩なのだから。法学部で出会った優等生は、勉強の量と質においてとても私が太刀打ちできるようなレベルではなかった。そのルサンチマンをこじらせた結果、「勉強しないほうがカッコイイ」という奴隷一揆（ニーチエ）さながらの価値転換をやったのけて、いざ哲学の世界に踏み込んでみると、ここでもまだ私は勉強をしすぎていることが分かった。本当にみんな勉強しないのだ！

だからそのぶん彼らは、ひとつの言葉、ひとつの概念、ひとつの問題を、丁寧に時間をかけて執拗に考察することに長けていた。しかし私はその粘り強さについていくことができず、どうしても勉強してしまうのだった。だって、その問題ははずっと昔にもっとずっと頭のよい誰かがもっと鋭い切り口で提示していたかもしれないじゃないか。それを知らずに一から積み上げていくなんて、なんとという時間の無駄だろう。こうして私は、自分の言葉で丁寧に哲学を紡いでいくという大事な経験をおろそかにしたまま、とても勉強したおかげで、このご時世に哲学を教えてメシが食えている。そしていまになっても、自分の言葉で丁寧に哲学をしている人を見ると、ねたましい気持ちになって、「そんなことはとっくの昔に誰それが言ってるけどね」などと憎まれ口を叩くのだ。どうです、こじらせてるでしょう？



談話室

教員によるエッセイコーナー